百々裏話 (4)

おもてあきら

蟻通

この曲が世阿弥作であることは間違いのないことで、申楽談儀の中にも幾度かこの曲の名が出てくる。申楽談儀という本は、世阿弥の時代の能の有様を知るために何よりの好資料となる本なのであるが、完全な本文を伝えた写本が無いために、読み方のわからない部分や、誤まつて読んでいるところが少なくない。しからば蟻通に関する記事はどうであろうか。次の一文は、申楽談儀序段の、世阿弥の芸風を述べた項の一節である。川瀬博士の世阿弥二十三部集の本文をそのまま借用したが、吉田東伍博士の世阿弥十六部集、能勢朝次博士の世阿弥十六部集評釈も同じように読んでおられる。

> 増阿、世子の能を批判して言ふ。……蟻通の初めより終りまで喜阿。……「蟻通とも思ふべきかはとは、あら面白の御歌や」など、「これ六道の巷に定め置いて、六の色を見するなり」などやうなる所、「何となく宮守なんどは、深夜の鐘の声、御燈の光」など、「夜毎燈火もなく、すずしめの声も聞えず」、か様の所、皆喜阿懸りなり。……

これは、田楽の名人であつた増阿弥が、世阿弥の芸風を批評し、蟻通の謡い方が、田楽の方で音曲に秀でていた喜阿弥（亀阿弥）を学んだものであることを、具体的な例をあげて指摘したところである。「　」で囲んだ文句が蟻通の詞章を引用したと考えられている部分であるが、これを現在の観世流謡曲と比較してみると、二か所が相違している。

○「宮守」と「宮寺」。

その一つは、前掲の引用文で「宮守なんどは」とある部分が、今は「宮寺は」となつていることだ。観世流の室町時代の古写本や観世以外の諸流では「宮寺なんどは」とある。観世流だけが観世黒雪の時代に「なんど」をはぶいてしまつたものらしい。従つて、この部分の相違は、「宮守」と「宮寺」に限定して考えて差支えあるまい。さて、蟻通のこの部分は、「宮□などでは夜更けの鐘の声が聞こえ、御燈明の光が輝いていてこそ神々しい感じがする」という意味であるから、宮守では意味が通らず、「宮寺」が正しいことは明瞭である。実は、これは申楽談儀の本文としても「宮寺」の方が正しいのである。申楽談儀をはじめて刊行された吉田東伍博士が採用された写本は小杉本（大正震災で焼失）であるが、その後に発見された他の申楽談儀写本に較べると、小杉本はもつとも良くない本だつたのである。その小杉本だけが「宮守」で他の諸本はみな「宮寺」なのであるから、当然ここは「宮寺」を正しい本文と考えるべきであろう。能勢先生も川瀬博士も、他の諸本を調査されたのにこの事に気付かれなかつたのは、「守」と「寺」が草書で書くとすこぶる紛れやすい字であることが原因らしい。

○「よこと」と「にこそ」

もう一つの違いは、「夜毎燈火もなく」の「夜毎」の有無である。これは、観世流のみでなく、諸流にも、古写本にも見えない文句であり、第一ここに「夜毎」のことばのあるのがおかしいのである。成程シテが「あら無沙汰の宮守どもや」と憤慨してはいるけれども、宮守だつて毎晩サボタージュしていたわけではなく、たまたまこの夜は大雨が降つたために「社頭を見れば」「燈火も」無かつたのであろう。これはまあ屁理窟に近いが、「夜毎」

の文句が無い方がよいことは確実であろう。

さて「夜毎」などと漢字を宛ててしまうと読む者の目に決定的なもののように写るものであるが、申楽談儀の本文は漢字ではない。小杉本と芸大本（和学講談所旧蔵本）の二本には「よこと」となつている。ところが、観世本・松井本・黒川本の三本は「にこそ」とある。これらのすべての本は柳亭種彦旧蔵本（大正震災で焼失）から写した本であるから、一方が正しく、一方が写し違えたものに相違ない。「よこと」と「にこそ」を並べてみると、「に」の変体仮名と「よ」はすこぶる似た文字であり、「こと」と「こそ」もしばしば誤写される仮名文字なのである。能勢先生や川瀬博士は「よこと」の方を採用されて「夜毎」の意に解されたのであるが、私は「にこそ」の方が正しいと考えている。「にこそ燈火もなく」では意味が通らないではないかと反論される方もあろうが、「にこそ」をその下の文句に続けるから具合が悪いので、上につけて「深夜の鐘の声、御燈の光などにこそ」「燈火もなく……」と読むべきものであろう。これならば現在の詞章とも一致するし、諸本の信用度も「にこそ」の本の方が高いのである。

前掲の引用文が〝「……」など、「……」などやうなる……〟と、などを並べた構文であることが、次々と誤読されてきたことの遠因であろう。

○「かざして」と「かささして」

蟻通など、松明を振り翳して出づる、肝要ここばかりなり。扇などにてしては、わろかるべし。花筐の能には、花筐をいかにも執すべし。……

これは同じ申楽談儀の十八段「能の役人等」の項の一部である。川瀬博士の世阿弥二十三部集に拠つたが、吉田博士も能勢先生も、同じく「たいまつをふりかざして」と読んでおられる。しかし「かさして」となつている写本は小杉本と松井本の二本で、芸大本と黒川本には「かささして」とある。この相違は、四種の本のもとになつた種彦本が「かさして」か「かさゝして」か不明瞭な書体であつたことが遠因ではないかと思う。「し」と「ゝし」は紛れ易い仮名文字の代表的なものである。前者の本文を採用すれば「松明を振りかざして」であるが、後者を採れば「松明を振り、傘さして」であるから、たつた一つの「ゝ」の有無から、大変な意味の違いを生じてしまうのである。本の信用度は五分五分なので、どちらの本文を採用するかは主観的な判断にならざるを得ない。あとに続く「扇などにては悪かるべし」の文が松明に関することで、傘とは無関係なので、「松明を振りかざして」と解する方が良いとも言えようが、諸流の現在の演出に、蟻通のシテが松明を振り、傘をさして登場する形式を残しているのであるから、「傘さして出づる」の解釈も十分可能である。

従来はすべての人が前者を採用しているのであるが、私は「松明を振り、傘さして出づる」の方を採りたい。実はまだ蟻通の能を見たことがないのであるが、「肝要ここばかり」と世阿弥の言う蟻通のシテ登場の姿で、もつとも目立つのは松明よりも傘であろう。見てもいないくせにこんなことを言うのは〝盲蛇に怖じず〟の類であろうが、傘をさして登場すること自体が、今の能にはそぐわないようにすら思われる。それだけにかえつて「傘さして出づる」ことは、蟻通の肝要の意匠であると信ずるのである。世阿弥がその傘のことを無視して松明のことばかり言うのは、ちよつとおかしいのではあるまいか。

とにかく、申楽談儀を正しく読むのは骨の折れる作業である。

（四・一）